



Title	増えている重複（多重）がん：PET/CT 検査の効用
Author(s)	高見, 元敞
Citation	癌と人. 2014, 41, p. 17-20
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/36328
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

増えている重複（多重）がん (PET/CT 検査の効用)

高見 元 もと ひさ
斂*

はじめに

高齢化社会がいちだんと進み、それに伴ってがん患者が増加しています。がんは加齢に伴つて発生頻度が高くなりますから、がん患者が増えるのは当然の現象かもしれません。いまでは、日本人の二人に一人ががんになり、三人に一人ががんで死亡する時代になりました。がん死亡の増加傾向は、世界有数の長寿国である日本の宿命ともいえます。

ところで、がんは必ずしも一つの場所だけに発生するとは限りません。同時に複数のがんが発見される人もあれば、一度がんを経験しながら、二度三度と次々にがんにかかる人も稀ではありません。

がんが二つ以上の臓器に発生する場合を「重

複がん（多重がん）」と言い、同じ臓器に多発した場合を「多発がん」と言いますが、いずれにしろ、歳をとるほどがんが多発することは間違ありません。何度もがんを経験した人は、「どうして自分だけががんに見舞われるのだろうか」と嘆きますが、それは、昔に比べて長生きしたことの裏返しともいえるのです。

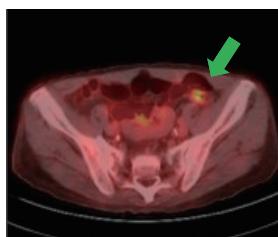
ところで、重複がんの発生は、患者だけでなく、医師にとっても、重要な問題なのです。重複がんの治療をどうするのか、がんの専門医は日々頭を悩ませています。

重複がんが多くなったもうひとつの理由

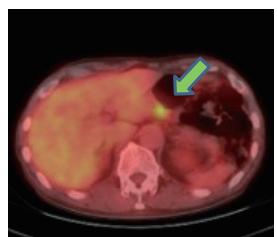
重複がんが増えてきた理由のひとつに、がんの治療成績が良くなってきたことが挙げられま



a 肺がん



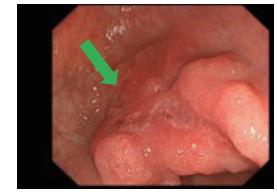
b S状結腸がん



c 胃がん



d 結腸がん (内視鏡)



e 胃がん (内視鏡)

(註) 画像は、下段の内視鏡像を除き、全て PET/CT 画像です。
(図 1～図 4 すべて同じ)

図 1 肺がんの治療 2 年後に新たな肺がん、結腸がん、胃がんが発見された症例

* 公益財団法人大阪癌研究会評議員、社会医療法人大道会森之宮クリニック所長

す。一見矛盾したように見えますが、決してそうではありません。がんの治療成績が向上しますと、一旦がんにかかる人も長生きする人が増え、その結果、ひとつのがんが治ってから数年して、また異なった場所にがんが見つかることがあります。長生きすればするほど、幾つものがんにかかるといつても過言ではありません。

ただし、がんになりやすい人と、なりにくい人がいるのも事実です。それには、生活習慣や生活環境、あるいは遺伝的な素因などさまざまな要因が影響しているに違いありません。

重複がんはどの程度、どこに発生するのか

重複がんは、がん患者の1~2%に発生する⁽¹⁾といわれていますが、疫学的な調査が進むにつれて、最近では、その頻度はもっと高いのではないかと考えられています。ある報告によると、60歳以上の患者では、異時性多重がんの発生頻度が10%以上におよぶとされています⁽²⁾。

頭頸部がん・食道がん・肺がんなどは、他の臓器に比べて重複する頻度が高いのですが、おそらく喫煙や飲酒などの<がんの危険因子>が共通していることがその理由のひとつなのでしょう^(2,3,4)。また、男性では肺がんと胃がん

あるいは肺がんと大腸がんの重複が多く、女性では乳がんと大腸がん、乳がんと子宮がんしばしば重複して発見されます。つまり、発生頻度の高いがんほど重複しやすいのです。

重複がんの診断

がんを診断するには、さまざまな手段がありますが、重複がんの発見には、最新の機器を使って全身をくまなく検査できるPET/CT検査がきわめて有用です。

PET/CTはこの数年で急速に普及し、いまではがんの診断の一翼をなす重要な検査になりました。とくに重複がんの発見に貢献することが多く、それによって治療方針が左右される場合も少なくありません。

今回は私たちが経験した多数の症例の中から、PET/CT検査によって発見された代表的な重複がんをいくつか選び、皆さんの参考にしたいと思います。

異時性重複がんの症例

1) 肺がんの治療2年後に、新たに肺がん、結腸がん、胃がん同時に発見された症例

症例は約50年以上の喫煙歴のある70歳代男性。約2年前に右肺中葉の扁平上皮がんに対

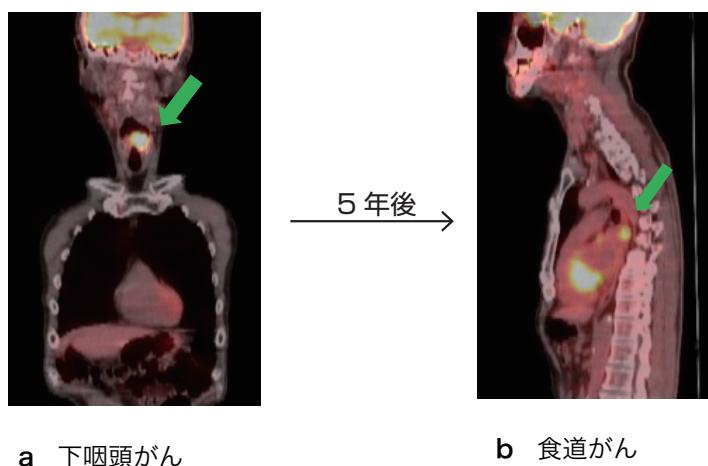


図2 下咽頭がん治療5年後に発見された食道がん

して化学放射線治療が施行され、経過良好でしたが、その後、P E T / C T 検査でふたたび右肺上葉にがんが見つかり（図 1 a）、同時に S 状結腸がん（図 1 b, d）、胃がん（図 1 c, e）が発見されました。全部で四つのがんが発生したことになります。高齢者に発生した多重がんの典型です。

（すこし専門的な話をしますと、二つ目の肺がんは原発性扁平上皮癌、結腸がんは 0—1 型の腺腫内癌、胃がんは 0—I c 型（深達度 SM）の中分化腺管腺癌でした）。

2) 下咽頭がんの治療後に発見された食道がん 症例

症例は飲酒と喫煙歴がある 60 歳代の男性。進行した下咽頭がん（図 2 a）に対して化学放射線治療が行われ、その 5 年後に PET/CT 検査で食道がんが発見されました（図 2 b）。咽頭がんも食道がんとともに喫煙と飲酒が発癌に関連しているといわれていますが、この症例も、その典型といえます。

咽頭がんや喉頭がんなど、喉に発生したがんに対しては、かならず食道の精査をしておくことが大事です。また逆に、食道がんの手術をした患者さんに対しては、喉のがんに注意して、

耳鼻咽喉科的な検査を定期的にしておくことが必要です。さらに、治療後の経過観察に際して、PET/CT 検査を有効に使い、重複がんを早く見つけることも重要です。

同時性重複がんの症例

3) 肺がんと乳がんの重複例

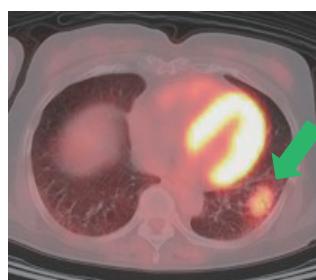
症例は 60 歳代の女性。原発性肺がんの病期診断を目的として、P E T / C T 検査が行われ、予想外の乳がんが発見された症例です。左肺の下葉（S 9）に 27 mm 大の結節があり（図 3 a）、気管支鏡下細胞診で腺癌と診断。同時に、左乳房 A 領域に腫瘍が見られ（図 3 b）、穿刺細胞診で乳管癌と診断されました。

肺がんと乳がんは同時に手術が行われ、短期間に退院することが出来ました。

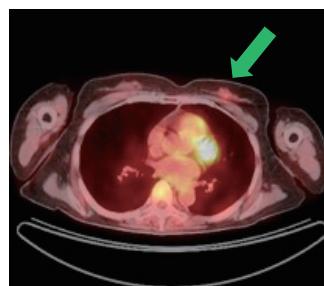
4) 子宮頸がんと上行結腸がんの重複例

症例は 60 歳代の主婦。進行子宮頸がんの病期診断に際して P E T / C T が行われ、偶然に無症状の上行結腸がんが発見された症例です。

子宮頸部に、膀胱浸潤を伴うがんが発見され（図 4 a）、さらに両側閉鎖リンパ節に転移が見されました。上行結腸にも腫瘍陰影があり（図 4 b）、内視鏡で、結腸がんと診断しました



a 肺がん



b 左乳がん

図 3 肺がんと乳がんの同時性重複

(図4c)。

まとめ

がんのPET/CT検査を専門とするわれわれの施設には、毎日たくさんの患者さんが検査を受けに来院しますが、上記のような重複がんの患者さんは決して少なくありません。

重複がんの組み合わせは様々ですが、当然ながら、肺がんと胃がん、乳がんと大腸がんなど、日本人に多いがん同士の組み合わせが多くなります。それとともに、タバコやアルコールを好む人では、喉頭や咽頭など、喉のがんと食道がんが重複しやすく、生活習慣にもとづく多重がんの発生にも注意を払う必要があります。

最後になりますが、いかに進歩したとはいえ、医療の世界にも盲点があります。たとえば、がん拠点病院など、がんの専門医が揃っている医療機関でも、医師はともすると自分の専門領域

にとらわれすぎ、それ以外の疾患に目が行き届かない場合が少なくありません。重複がんはときとして全く予想外の場所にも発生するからです⁽⁵⁾。

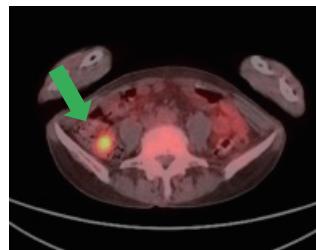
全身をくまなく見渡すことが出来るPET/CT検査は、盲点を補う意味でも、がんの診断に欠かすことができないと言えます。

文献

- 1) Hideaki Tukuma et al : Jpn.J.Cancer Res. 85, 339, 1994
- 2) Takehiro Tabuchi,et al:Cancer Sience 103, 1111, 2012
- 3) 吉野邦俊 他：胃と腸 40 (9) 1229, 2005
- 4) 菅一能 他：山口医学 59 (1), 23, 2010
- 5) 高見元敏 他：成人病 53 (1), 44, 2013



a 子宮頸がん



b 上行結腸がん



c 上行結腸がんの内視鏡

図4 子宮頸がんと上行結腸がんの同時性重複